



インドネシア

BOP層実態調査レポート

調査実施日: 2012年10月

調査場所: ジャカルタ首都特別州ジャカルタ市

調査対象: ヒアリング対象者

男性(50歳代、地方都市在住の運転手)	男性(20歳代、建築労働者)
男性(30歳代、タクシー運転手)	男性(20歳代、運転手)
男性(20歳代、繊維市場の店員)	

*インドネシアルピア換算レート 10,000ルピア=約82円(2012年9月平均レート)

概要

通常、余暇という概念は、所得が日々の生活をギリギリ支えるレベルから多少上がり、ある程度生活に余裕ができた段階で現れてくるものと考えられる。BOP層が余暇にどれほど時間と資金を投下できるかという点は、インドネシア社会の全体的な豊かさの変化を見ていく中で重要なポイントの一つとなるだろう。

ところが、実際に今回、BOP層と思われる人に「休みの日にどう過ごしているか」と質問しても「何もしていない」「家にいるだけ」との答えが多かった。「家族でどこかへ出かけたりしないのか」と質問しても「出かけない」との答えが多く、余暇という概念はまだ一般的ではないようであった。特に、運転手は、空いている時間にオーダーが入れば、休日であっても仕事を入れ、少しでも収入を増やそうとする。オフの時間は疲れているので、家で寝ているという回答であった(運転手2名へのインタビュー)。

そこで、BOP層でも家族連れで訪れると想定されるジャカルタ市内のラグナン動物園で何人かにインタビューをした。ラグナン動物園は、休日になるとたくさんの訪問者で溢れるが、その多くは家族連れやグループである。自動車やバスが駐車場を埋める。

最初は、ジャカルタ郊外のチブブールで建築労働者(大工など)をしている20代の男性の家族で、ラグナン動物園には初めて来たという。雇い主が建築労働者の仲間を誘い、車をチャーターして、家族も入れて20人程を連れて来ている。雇い主は年に2回程度こうした機会を作っており、今回はタマン・ミニ公園へ行ったという。今回のラグナン動物園の入場料(大人一人4,500ルピア、約38円)は雇い主が払ってくれる。他に余暇は特になく、家でテレビを見る程度とのことであった。



家族連れで賑わうジャカルタ・ラグナン動物園入口





運転手をしている別の男性は、自分の兄に誘われて家族(妻と娘)で来たという。ラグナン動物園には2カ月に1回程度来る。タマン・ミニ公園へも行くことはあるが、入場料が大人一人9,000ルピア(約75円)と高いので、動物園の方へよく来る。兄は家電の工場で働いているとのことで、兄と一緒に、家族も連れて北ジャカルタのチリンチンへ魚釣りに行ったこともある。他には、家でテレビを見ているという。



ジャカルタ・ラグナン動物園の露天で土産物を買う人々

帰宅のためのバス待ちをしていた男性は、タナアバンの繊維市場でムスリム女性向けのショールを売る店の従業員(月収150万ルピア、約1万2,500円)で、ようやく休みが取れたので、家族(妻と2歳ぐらいの娘)と一緒に初めてラグナン動物園へ来た。通常は土日も働き、帰宅すると家でテレビを見るのが楽しみということである。ラグナン動物園までは、コバジャという中型路線バス(料金は一人2,000ルピア、約17円)を使い、ミネラルウォーターを買った以外は、お土産は何も買わなかった様子である。年間3,000ドル以下というBOP層の定義に従うと、ラグナン動物園へ車で来る人々は、決して富裕層には見えないが、年間所得3,000ドルは超えているものと見られる。



スナヤンシティのショッピングセンター

建築労働者、運転手、店の従業員といった人々は、ジャカルタでは底辺層に近いと見なされるが、そうした人々でも、団体で、あるいは収入のある家族に連れられて、あるいは自力で、年に数回のこととはいえ、動物園などへ家族で来るようになってきた。若いカップルは、月賦で買ったバイクに相乗りして行楽地へ出かけたりもする。余暇の多くは家でテレビというパターンは変わらないが、家族や友人と、収入の多寡に応じた頻度で、動物園などの行楽地やショッピングモールでのウィンドーショッピングなどへ出かけている様子である。

所感

インドネシア人の余暇の過ごし方はあまり多様ではなく、特にBOP層では、収入機会があるなら休日でも働き、空いている時間は家でテレビを見て過ごすのが一般的なようである。携帯電話を持っている者は、それで友人とSNSをしたりゲームをしたりするというのも余暇の過ごし方の一つであろう。ただし、ラマダン明けなどの特別な休日は、余暇というよりも恒例行事と認識しているようである。

BOP層の余暇への支出はまだ厳しい様子だが、会社員などになって収入が一定し、資金的な余裕が出てくると、モノへの消費が一気に進み始める。モノを買うという行為自体を通じて、自分たちが豊かになったことを他者に見せ、自ら実感することになる。経済開発論では「年間3,000ドルを超えると一気に消費が進む」とよくいわれるが、現場での観察からも、それが妥当に思える。



【免責事項】本レポートで提供している情報は、ご利用される方のご判断・責任においてご使用ください。ジェトロでは、できるだけ正確な情報の提供を心掛けておりますが、本レポートで提供した内容に関連して、ご利用される方が不利益等を被る事態が生じたとしても、ジェトロ及び執筆者は一切の責任を負いかねますので、ご了承ください。